



2018年度
傾向と対策

英語

傾向分析 多様な種類の長文に対応できる力が必要とされる

① 出題形式は？

大問数は3題で、その全てがマークセンス方式による四者択一の解答方式となっている点、解答数が合計20個である点も例年通りの形式である。試験時間は、数学または国語と合わせて2科目で60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰは長文問題で、内容はルネサンスに関する文章である。本文の内容に関する小問が5問出題されている。5問とも英文の設問文と選択肢である。大問Ⅱは対話文となっており、空欄補充問題が10問出題されている。旅行エージェンシーで、スタッフが休暇先を客に提案するという内容となっている。大問Ⅲは大問Ⅰの半分ほどの文章の空欄補充問題で、内容は習慣に関する文章である。

③ 難易度は？

大問Ⅰの長文は昨年よりも多少文章量は増えているが、特に難しい表現や単語が使用されているわけではないので、標準的な難易度といえる。大問ⅡとⅢにおいても英文としては平易であるといえる。大問Ⅲでは前置詞などの基礎知識が問われる。

受験対策

① 文脈を把握する力を養う

大問Ⅰの長文の内容把握問題や大問Ⅱの会話文の空欄補充問題で共通して求められるのは、文脈を正しく把握する力である。大まかでも文脈を正しく把握できていれば、すべての単語の意味が理解できていなくても、前後関係や会話の流れで正解を選ぶことも不可能ではない。まずは何について話しているのか、どんな主張を述べているのか、だれに対してどのような返事をしているのかを、大まかにつかめるように練習しよう。

② 文法や熟語をマスターする

大問Ⅰ～Ⅲはいずれも突出して難しい文章ではないが、前置詞や関係代名詞などを用いた基本表現を確実に覚えておく必要がある。内容把握、空所補充にしても、文章の内容を正しく判断するためには欠かせない力になる。教科書を一通り読んで重要事項についておさらいした後に、問題集などを用いて忘れていない部分がないか確認する、忘れていたところや分からないところがあったら教科書に戻るといった学習をして、基礎力の向上に努めよう。

③ 過去問題をうまく活用した対策をする

この入試形態では、英語以外の科目と合わせて60分で完答しなくてはならない。1科目30分で解ければよいのではあるが、もう一方の科目に余裕をもって臨むためにも、できれば20～25分くらいで解けるようにして、見直しをする時間も確保したい。そのためにはまずは過去問題を使って、自分の解答時間のペース配分に慣れる必要がある。大学のこれまでの傾向を知るといっても過去問題を解きなおすのは大変有効な手段になるため、繰り返し問題を解き、自分なりのペース配分をつかみつつ、問題のレベルや出題内容、問題形式に慣れておこう。

数学

傾向分析 数学Ⅰでは全範囲の基礎的な知識及び計算力が必要
 数学Aでは得意とする分野の知識と理解を深めよう

① 出題形式は？

全問マークセンス方式で、必答問題と選択問題に分かれている。必答問題として大問2題（各大問の中に小問3問ずつ）、選択問題として大問3題（各大問の中に小問3問ずつ）のうちいずれか2題を選んで解答する。マークする箇所は選択する問題によって35～40個ほどになる。試験時間は、国語あるいは英語と合わせて2科目で60分である。

② 出題内容はどうか？

必答問題では、因数分解、平方根、三角比の相互関係、箱ひげ図に関する問題が出題された。また、選択問題では、順列と組み合わせ、不定方程式、三角形の内心と外心に関する問題が出題された。数学Ⅰ・Aの範囲から幅広く出題されている。

③ 難易度は？

すべての大問において、教科書レベルの例題や章末問題を解いていれば十分に対応できる構成となっている。定期テストを解き直すなどしていくとさらに理解が深まっていくであろう。

受験対策

① 幅広い範囲に対応した学習を

数学Ⅰ及び数学Aからまんべんなく出題されているため、部分的に絞るのではなく網羅的な学習が必要になってくる。教科書の学習だけでは不安に感じるようであれば、基礎問題を取り扱った問題集や応用問題まで取り扱った参考書など、自分の現段階のレベルに合った補助教材を使うことで、苦手な分野の克服をしていながら確かな学力の向上を目指そう。

② 最初に問題全体を見渡して確認する

難易度の高い問題は特になく、全体的に基礎がしっかり身につけていけば解答は難しいものではないが、それでも個人個人で得意不得意な分野があるだろう。必答問題の方が選択問題より易しいというわけではないので、まずは全体を見渡して、どこの問題から解き始めるのがベストなのかを見極めよう。限られた時間を最大限に活用する努力もこの試験では求められてくる。

③ 再確認をするための労を惜しまない

マークセンス方式の試験であり、時間も短いためできるだけ解答に掛ける労力を押さえたいだろうが、途中式を省略しながら解き進めるのは得策とは言えない。限られた時間の中で余裕をもって見直すためには、途中式を丁寧に残して計算過程を確認する必要がある。難解な問題ではないため、単純な計算ミスや勘違いが解答に大きく響いてくる。短い時間の中で、あとで見直す時間も視野に入れた解答をできるくらいの余裕があって初めて高得点を狙えるので、解答過程の小さな労を惜しまないように心掛けて学習を進めていってほしい。

国語

傾向分析 読解力と国語知識の両方が求められる

① 出題形式は？

小問8問からなる長文読解1題と、国語知識を問う小問2問からなる1題の、大問2題で構成されており、解答数は20個である。全問マークセンス方式で5つの選択肢の中から1つを選ぶ選択問題（大問I問7の並べ替え問題のみ四者択一）である。試験時間は、英語または数学と合わせて2科目で60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Iは論説文を用いた読解問題になる。江戸時代の社会制度に対する著者の主張がまとめられている。小問別にみると、漢字、語句の意味、接続詞、熟語の空所補充、文章の並べ替え、趣旨把握が出題されている。大問IIは四字熟語、文学史が出題されている。

③ 難易度は？

大問Iの論説文は多少読みにくさは感じるものの、解答するにあたってはそこまでの障害とはならない。標準的な難易度といえる。しかし、接続詞を問う問題や文章の並べ替えの問題など、文章を正しく読み進める力が求められる。大問IIの知識問題は、基礎的な難易度である。

受験対策

1 基本的な文学史の知識を押さえ、漢字・四字熟語などの基礎知識を身につける

文学史の出題数は2問のためそこまで重視しなくてもよいと一見勘違いをしやすいが、解答数20個中の2個のためこの割合は侮れない。そのため出題数自体は少なくとも、文学史で確実に正解をしておきたい。出題される文学史自体は難しいものではなく、基礎教養レベルの内容になるため、教科書に出てくる文学者とその代表作は一通り覚えておくことをお勧めする。また、四字熟語は大問I・IIに共通して出題され、その他の漢字の書きや接続詞でも、あまり聞きなれない言葉などが出題されていることがある。そのため基礎的な国語の知識が不可欠になる。この知識が不足していると、読解問題にも支障をきたしかねないため、ぜひとも確実に力にしたがい。

2 論説文の構成に慣れる

論説文は内容や文体で読みにくさを感じることもあるかもしれないが、実は一度論説文の読み方に慣れてしまえば読み解くのにそこまでの労を必要としない。筆者の主張、具体例などが挙げられている部分を個々にまとめて、それぞれの部分では何について述べているのか、部分同士にどのような関連があるのかを筋道立てて理解していけば、内容把握が一段と楽になる。また、日ごろから新聞などに目を通すことで、主張や関連事項を見分ける能力を養おう。

3 時間配分に注意する

大問が2題で、そのうち1題が知識問題、また解答数が20個となると、時間的には余裕があるように感じるかもしれないが、英語または数学と合わせて60分ということを考えると、それほど悠長にはしてはられない。見直し時間も考えると、できれば20～25分程度で解き終わりたい。まずは、過去問を利用して所要時間を測っておくことをお勧めする。また、長文読解は、先に設問に目を通していき、長文を読む時間を極力短縮する工夫をするのも一手である。

英語

傾向分析 長文や会話文、語法や単語の基礎知識が問われる

① 出題形式は？

大問が4題あり、解答数は大問Ⅰと大問Ⅲが10個ずつ、大問Ⅱと大問Ⅳが5個ずつの合計30個である。全問マークセンス方式の選択問題で、四者択一形式である。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰは300語程度の文章読解問題で、新築パーティーについて書かれた説明文である。新築パーティーを開く目的やその内容、ギフトとして持参するのに適したものについて述べられている。設問は、単語の意味を選択するものが4問と多く、その他は本文の内容に合う英文を完成させる問題である。大問Ⅱは空所補充形式の文法・語法問題で、100語程度の短い文章である。大問Ⅲは駅の切符売り場での客と駅員との会話文で、語数は250語程度である。会話の流れが通るように、空所に入る適語句を選択する。大問Ⅳは1文ごとの文法・語法問題で、空所補充形式である。

③ 難易度は？

大問Ⅰは親しみやすいテーマの文章であり、設問文や選択肢も本文を複雑に言いかえたものはない。また、語法問題や単語問題も高等学校で学習する標準的なレベルで、全体的に解答しやすいといえる。大問Ⅱと大問Ⅳの文法・語法問題は、基礎～標準的な難易度である。大問Ⅲは会話表現の知識を問う設問が多いが、文の流れをつかめれば選択肢を絞ることが可能な標準的難易度の問題である。

受験対策

① 基本事項をマスターする

文法・語法問題については、中学校～高等学校で扱う文法を網羅した参考書を1冊、確実にマスターするのが合格への近道である。設問は動詞の時制や活用、前置詞や代名詞を中心とした基本的な事項を確認するものが多いので、参考書にあるチェック問題で基礎を固めておくことよい。会話問題については、知識の有無で得点に差がつく設問がほとんどである。つまり知識さえあれば、選択肢に迷うことなく正答を導き出せる設問が多いということである。基本的な会話表現が網羅された問題集を1冊準備し、会話の定番表現を身につけるとよい。いずれも何冊も手を広げるよりも、それぞれ1冊に絞って知識を蓄える方が効率的である。

② 文章読解問題は文脈把握力を鍛えて速読力アップ

高等学校で使用している教科書の素材文や、テーマを広げる意味で同等レベル・語数の英文読解問題集を準備し、英文を読むのに慣れることが最低限必要である。今年度の文章読解問題のように、身近な習慣をテーマとした文章では、不明な単語や語法などがあっても文脈から書かれている内容を比較的推測しやすい。文脈から意味を推測する能力を身につけ、速読力アップにつなげたい。また、先に設問文や選択肢に目を通すスキミング、該当箇所を探し読みするスキミングの両方の力を養うことで、見直しの時間をより多く確保することが可能である。合計解答数はそう多くないものの、大問Ⅰでは内容把握を問う比較的長めの選択肢も見られることから、必要な情報を素早くつかみ、解答に費やす時間を短縮する練習を重ねるのが肝要である。

③ いろいろなタイプの文章に慣れる

当試験では長文読解及び会話文を読み解く問題が出題されている。どちらも試験としてはメジャーな形の出題であり目新しいものではないが、長文と会話文では使う英語表現や単語・内容が大きく異なるため、両方の形式に対応できる力が求められる。教科書を有効に用いて日ごろから文章に慣れる努力をしよう。

数学

傾向分析 数学Ⅰ・Aの内容を網羅した知識が必要とされる

① 出題形式は？

全問がマークセンス方式で、問題数は大問6題、Ⅰ～Ⅲは必答問題、Ⅳ～Ⅵは3題のうち2題を選んで解答する選択問題である。必答問題3題での小問数は8、マーク箇所は22である。選択問題については、Ⅳは小問数3、マーク箇所8、Ⅴは小問数3、マーク箇所6、Ⅵは小問数3、マーク箇所8である。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰが小問集合（多項式の計算、三角比、集合）、大問Ⅱが2次方程式の解、大問Ⅲがデータの分析からの出題になる。選択問題は、大問Ⅳが確率、大問Ⅴが整数問題、大問Ⅵが図形の性質からと、いずれも数学Aの範囲からの出題であった。

③ 難易度は？

全体の難易度は高くはなく、数学Ⅰ・Aの範囲内で収まっている。教科書の内容を確実に把握して、時間配分を誤らない限り、さほど難しくはない。

受験対策

1 正確に計算する力を養う

それぞれの小問ごとに異なる範囲が出題されているため、網羅的な学習が望まれる。問題自体はさほど難解でないものが多いため、教科書や問題集を繰り返し解くことで基礎知識を養おう。その際に自分の得意分野・苦手分野を把握して、選択問題でいたずらに時間を浪費しないで解答できるようにしよう。知識はあっても計算に時間がかかっているようでは本末転倒なので、いかに素早く正確に計算をするかもカギになる。

2 計算過程を書く習慣を身につける

マークセンス方式のため、計算過程を省略しがちであるが、計算過程を書き残しておく習慣をつけることによって、余った時間で見直しをしたり、間違いに気づいたりできる。問題冊子内にある計算用紙をうまく活用して、自分の思考手順を分かるように残しておこう。余った時間で心に余裕ができた際に見直すと、それまで気づかなかった間違いに直前で気づくということは往々にしてあることなので、面倒くさがらずに逐一計算過程を書き残しながら進めていこう。

3 最初に全体を確認してから解く

本学の入試問題では必答問題と選択問題の2種類がある。特に選択問題は小問3題の中から2題を選ぶ必要があるため、必答問題を順番に解いてからどの問題を選ぶか考えるというやり方は非効率になることもありうる。まずは、全体の問題を確認して選択問題を選んでから解き始めるのがベストといえる。問題数は一見多くはないが、油断していると計算に時間を取られ余裕のない状態で終わることになってしまうのでそれは避けたい。試験の際に完璧な精神状態で臨むのは難しいかもしれないが、こういった工夫の一つで精神的余裕を作ることが可能なので、過去問題を解きながら試験の形式に慣れつつ自分に合った方法を模索していこう。

国語

傾向分析 文章はややつかみにくいが問題は平易
正確な知識と丁寧な読解が必要

① 出題形式は？

大問が2題、各大問に小問が10問ずつの構成で、全問マークセンス方式の五者択一問題である。解答数は全部で36個である。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

例年同様、各大問はいずれも論説文から出題されており、小問の構成にも変化はない。小問1～3はそれぞれ漢字、語句の意味、空所にあてはまる語句を問う問題である。小問4～10は読解問題で、箇所内容の説明、理由説明、空所補充、脱落文補充、内容把握問題が出題されている。

③ 難易度は？

論説文は身近な題材を取り上げた文章であり、特に難解な言葉も使われていないので読みやすい。標準的な難易度といえるが、抽象的な表現や、論理がやや不明瞭で文脈に飛躍のある箇所が散見されるため、筆者の言いたいことをつかみにくいかもしれない。問題自体は平易な内容・レベルなので、選択肢をヒントにして本文を読み取るとよい。

受験対策

1 正確な言葉の知識

漢字や語彙の知識が本文の文脈の中で問われているので、まず本文の意味を正確に読み取らなければならない。漢字の問題にも言葉の意味の正確な理解が欠かせない。知識があいまいだと同音異字の選択に迷い、時間を取られることになる。日常的に新聞や論説文などを積極的に読み、読みながら言葉の意味・用法や漢字を確認して、意識的に知識を増やしていくようにしよう。模試や過去の問題に取り組む中で、知識が定着しているかどうか確認しよう。

2 間違いの原因を知る

読解問題が苦手な人が、やみくもに多くの文章を読んだり問題を解いたりしても読解力の向上にはつながりにくい。模試や過去問題などで、なぜ間違えたのかをじっくり見直してみよう。本文と選択肢とを突き合わせ、解説を読み、納得がいくまで原因を探ろう。例えばある語句を読み飛ばしていた、意味を勘違いしていた、自分の価値観で判断してしまった、離れた部分の記述を無視していたなど、間違いには必ず原因がある。

3 筆者の意図をつかむ

出題される論説文は、筆者の主張、根拠の説明、結論といった論理的な組み立てがはっきりした文章もあるが、随筆に近い、さほど論理的でない文章が出題される場合もある。接続語などで文の前後の関係がはっきり示されていない場合、その記述が否定的な意味合いなのか肯定的な意味合いなのか、前の記述を説明しているのか、後の内容を提示しているのかといった筆者の意図がわかりにくいことがある。ちょっとした単語に重要な意味が込められていることも多いため、一語一語を読み飛ばすことなく、正確に理解しながら読み進めるようにしなければならない。今回の出題内容は、選択肢を取捨選択することで、解き進めながら文章に対する理解を明確にすることができるようになっている。出題部分の前後を読むだけでも解答することは可能だが、全文を通して丁寧に正確に読むことで読解力を向上させてほしい。

日本史

傾向分析 基礎知識の積み重ねが高得点のカギとなる
文化史の内容もきちんとおさえよう

① 出題形式は？

問題は大問5題で構成され、全問マークセンス方式による四者択一の選択問題である。試験時間は60分で、解答数は、大問1題に対して小問10個の全部で50個となっている。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰ～Ⅳでは、文章中の空欄補充問題や下線部について問う問題が中心に出題されている。大問Ⅴは2つの文章の正誤の組み合わせを問う問題が10問で構成されている。

大問Ⅰは中国の王朝との外交・貿易、大問Ⅱは鎌倉幕府の政治、大問Ⅲは自由民権運動と憲法、大問Ⅳは戦後の経済史が問われており、それぞれ外交にかかわる問題や政治関連の問いなど幅広く出題されている。大問Ⅴは、古代から近世までの文化史について正しい内容を判断する選択形式の問題となっている。

③ 難易度は？

出題範囲は幅広く、分野也多岐にわたるが内容自体は難易度が高いものではないので、基礎的な教科書の知識を確実に押さえておけば得点を積み重ねることができる。ただし、60分で50問を解答することになるので、時間配分には十分気をつける必要がある。

受験対策

1 文化史の学習を確実に

大問1つ分を占める文化史は得点源として確実に押さえたい。まずは人物名と代表作・宗教・建築物など縁が深いものをそれぞれセットで結び付けて覚えよう。それから、かかわっている時代や文化・人物・歴史的な出来事などを関連づけて覚えていくことが重要である。授業で触れた人物や図録などで紹介されている神社仏閣や代表作を一通り押さえておけば、得点につなげることができるだろう。また、人物同士の関連や時代背景などを系統ごとに学習していくとよい。

2 学習スケジュールを作成する

大問ごとに異なった時代が出題されるため、各時代に対する標準的な知識が求められる。外交・貿易、経済、憲法、文化ごとで、年代に沿った学習を心掛けよう。範囲が広いため、無計画に学習をしても時間の無駄が発生しやすいので、現時点での自分の学力を把握し、目標となる地点をまずは設定してしてから計画的に学習に臨むことが望ましい。スケジュール管理をきちんとすることで、本番直前に慌てて一夜漬けをするリスクを回避することができる。

3 教科書を有効活用する

出題内容の範囲は広いが、難易度自体はさほど高くはないため、日ごろの学習が合否を分ける。まずは一番身近な教材である教科書を用いて学習を始めよう。教科書を一から読み直すだけでも、忘れていた部分や理解できていない分野などを再確認できるため、現時点での自分の学力を把握するのにちょうどよい。反復練習も込めて教科書を読み直しつつ、不得意分野を明らかにし、そのうえで弱い部分を問題集などで重点的に学習することをお勧めする。

また、過去問題は必ず1回は解くようにしよう。その際、出題形式・出題内容を確認するだけでなく、時間配分にも留意しておくとうい。

生物

傾向分析 応用問題に対応できる知識と計算スピードが求められる

① 出題形式は？

大問数4題、小問数30問、解答数33個からなるマークセンス方式の試験である。大問Ⅰ～ⅢはAとBの2つの文章を読んで解答する形式となっている。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

生物基礎と生物から、細胞（細胞分裂）、遺伝子（DNAの複製）、体液と恒常性（ホルモン）、免疫、神経（神経細胞）が出題されている。

③ 難易度は？

教科書を基本とした内容の構成となっており、応用問題も出題されている。教科書内で取り扱う内容のなかでも細かい部分に目を通しておくことが望ましい。一方で計算問題なども出題されているため、ある程度時間配分を意識した解答が求められる。

受験対策

① 幅広い出題分野に対応した学習

出題分野が幅広いため、各分野の偏りない知識が求められる。教科書内で取り扱う用語や公式は確実に覚えておきたい。また、実験に関する方法や考察などにも目を通しておくことで、試験で出題される実験を基にした問題にも対応したい。図を用いた出題が大問Ⅰ～Ⅲで出題されているため、説明文と図の両方をセットにして覚えておきたい。試験で出てくる図や教科書に載っている図は自分でもノートに書いて知識を整理しておくことも必要になる。

② 過去問題とセンター試験対策の問題集の両方を活用する

大学の入試傾向を把握するためにも過去の入試問題はぜひとも活用したい。また、マークセンス方式に慣れるためにも、センター試験対策用の問題集も一緒に利用したい。マークセンス方式は一見解答が簡単なように見えるが、マークする場所がずれただけで大失点につながる可能性があり、ぶっつけ本番で挑むにはリスクが高いといえる。学校の試験でもマークセンス方式は使われないため、自分から練習を進んでやらないと、試験形式に慣れる機会が少なくなってしまう。試験形式に慣れつつ、学力向上を目指すのであれば、過去問題とセンター試験対策用の問題集の両方を用いた自主学習を欠かさずすることをお勧めする。

③ 教科書に出てくる語句を説明できるようにする

細胞や遺伝子、免疫や神経などさまざまな分野から出題されるが、まずは教科書に出てくる語句を説明できるくらいに理解を深めるとよい。試験は単に教科書に出てくる単語を問うだけの問題ではないが、どのような応用問題であれ、基礎的な用語に対する知識がしっかりと身につけていれば、そこから応用して考え、答えを導くことも可能となってくる。正誤を問う問題も多く見られるが、「なぜ、どうして、そのような働きをするのか、その結果どのような反応が生まれるのか」を理解しておくことで、間違った選択肢がどうして間違っているのかを論理的に考えることができるようになる。